

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.24

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

- 特集1 新潟市文化財センターの紹介 P.2~3
- 特集2 第八回むかしのくらし展
「今日は何を着よう? ~着るものいまむかし」 P.4
- 常設展示室から 近代的港湾都市への変貌 P.5
- おすすめの一冊 文化財アーカイブの現場
—前夜と現在、そのゆくえ— P.5
- 特集3 活動展示2011に向けて P.6
- 館長日記 「浄足欄=沼垂城」の探索
—長者の伏せた「カメ」— P.7
- 収蔵資料紹介 大花火 P.7
- 博物館を支えるモノ・もの けさん P.8



たいけんのひろばで、
実際に糸車を触ってみる子どもたち

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.24

【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
11月6日 13:00~16:00	どんぐりであそぼう!	どんぐりを使ったおもちゃづくりなどを 楽しめます。	不要/無料
11月12日・13日 14:00~15:30	企画展関連プログラム 糸をつむいでみよう	糸車を使って、糸をつむぎます。	不要/無料
12月4日 14:00~15:30	キャンドルスタンドづくり	いろいろな木の実を使って キャンドルスタンドをつくります。	必要(11月24日必着) 小学生以上15名/200円
12月10日・11日 10:30~16:30 (※1)	企画展関連プログラム 裂き織りを織ってみよう	かんたんな織り機をつかって、 裂き織りのコースターをつくります。	必要(12月2日必着) 各日小3以上10人/200円
12月23日(金祝) 11:00~12:00	もちつき!	臼と杵を使った昔ながらのもちつきをします。	不要/無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。内容の詳細は、当館までお問い合わせください。
(※1) ひとりあたりの体験時間は30分程度です。参加ご希望の方は、希望日と参加可能な時間をご記入のうえ、お申し込みください。
なお12時から13時の間は実施していません。

暮らし探検講座 11月20日(土) 13:30~15:00 村落の立地とくらしの道具

現在開催中 企画展 第八回むかしのくらし展 「今日は何を着よう? ~着るものいまむかし~」

文明開化から現代にいたるまで、大きく変化した衣服について紹介し、その変化を通して社会の移り変わりを考えます。

【会期】2011年9月23日(金・祝)~12月18日(日) 【観覧料】無料(常設展の観覧は有料です)

【休館日】11月4日(金)、7日(月)、14日(月)、21日(月)、24日(木)、28日(月)、12月5日(月)、12日(月)

【関連たいけんプログラム】開催時間中に本館1階たいけんのひろばにお集まりください。

裂き織りを 織ってみよう

【日時】12月10日(土)・11日(日) 10:30~16:30 ※ひとりあたりの体験時間は30分程度です。
【定員】小学3年生以上10人(各日) 【参加費】200円 【申込締切】12月2日(金)必着
【申込方法】往復ハガキか電子メールにて、①プログラム名、②名前、③学年、④住所、⑤連絡先電話番号、
⑥希望日と参加可能な時間を記入の上、お申し込みください。時間は希望に応じて調整させていただきます。応募者多数の場合は抽選いたします。

イベント案内 大人向けモノ作り体験 「わらそうり作り」

【日時】2011年11月26日(土)・12月3日(土) 14:00~16:00 ※2回連続の体験プログラムです。
【会場】本館1階 たいけんのひろば 【定員】両日参加できる16歳以上の方15名
【参加費】無料 【申込締切】11月15日(火)必着
参加ご希望の方は、電子メールまたは往復はがきに、氏名・住所・連絡先電話番号を明記のうえ、
当館「わらそうり係」までお申し込みください。

博物館 講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、
毎月第4日曜日にお話しします。
時間：13:30~15:00 会場：本館2階セミナー室
申込：不要。当日受付、定員50人程度 資料代：100円

- 11月の講座：11月27日(日)
続・新潟市の水道 講師：若崎 敦朗
- 1月の講座：1月22日(日)
新潟湊を支える小廻 講師：伊東 祐之
- 2月の講座：2月26日(日)
新潟の海防と農兵隊 講師：安宅 俊介

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第24号
■ 編集発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷/株式会社博進堂

博物館を支えるモノ・もの けさん

展示室で、いちどはご覧になったことがあるのではないのでしょうか。

この「けさん」(卦算)は、巻物や、絵図・文書等を展示をする際に、資料をおさえて固定するのに用います。当館には、フロートガラス製のもの、高透過ガラス製のものがあります。高透過ガラス製のは、通常のフロートガラス製のものに比べて、ガラスがもつ青みの成分(鉄分)を減らしてつくられています。そのため透明度が高く、ガラス越しであっても資料の色を忠実にみることが出来ます。



次回 企画展 活動展示2011 「つたえる」展

資料のもつ歴史的価値を見出す調査活動、文化財を適切な方法で後世に伝えていく保存活動、資料の重要性や地域の歴史を広く知ってもらう普及活動など、常設展示・企画展示に限らない、みなとびあの様々な活動を展示します。

【会期】2012年1月7日(土)~2月12日(日)
【休館日】1月10日(火)、16日(月)、23日(月)、30日(月)、2月6日(月)
【観覧料】無料(常設展は有料です)

編集後記

「帆檣成林」第24号はいかがでしたでしょうか。今回の特集は、7月にオープンした「新潟市文化財センター」の紹介と、現在企画展示室で開催中の企画展「むかしのくらし展」と来年1月開催予定の「活動展示2011」についてお知らせするという盛りだくさんの内容となりました。お楽しみいただければと思います。みなとびあでは、週末になると本館1階のたいけんのひろばで様々なプログラムを開催しています(毎週ではありません)。プログラムは主に子どもが楽しめるものになっていますが、11月26日と12月3日には大人向けの体験プログラムが開催されます。2回連続でわらそうり作りを行います。貴重な体験ができる機会ですので、どうぞご参加ください。(並木)

■ 問い合わせ・申込みは博物館まで・・・ 新潟市歴史博物館みなとびあ

住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130
E-MAIL:museum@nchm.jp
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~17:00



新潟市文化財センターの紹介

新潟市文化財センター所長 高橋 保

北区にあった新潟市埋蔵文化財センターに替わるものとして、新潟市文化財センター(通称 まいぶんポート)が西区木場に新しくオープンしました。

新潟市内には、旧石器時代から江戸時代に至る七百か所以上の遺跡が知られています。平成十七年の十四市町村の広域合併後の各種開発事業等の増加に伴い、発掘調査も増加の一途をたどり、新たに発見される遺跡も年々増加しています。当センターは、各種開発事業や史跡整備等に伴う発掘調査を行い、出土遺物の調査研究・収蔵保管・展示活用を進めていくために、設置されました。

敷地面積は九千九百六十六平方メートルで、敷地内にはセンター本館のほか、移築された市指定文化財の旧武田家住宅と畜舎があります。

センター本館は三階建てで、建築面積約二千五百六十平方メートル、延べ床面積は約四千五百平方メートルです。一階にはエントランス(速報展示用のガラスケース大小計4個)、展示室、

研修室一・二(テーブル付で約百人収容。研修室二は通常体験学習室として利用)、保存処理室、特別収蔵庫、民俗資料収蔵庫(旧黒崎町で保管されていた民具で蒲原地方の農具、漁具、生活用具など)等があります。

展示室は一・二に分かれています。一・二合計の広さは二百六十三平方メートルで、展示点数は約千四百点になります。展示室一は導入展示で、「歴史を伝える出土品の世界」と題して、市内で出土した土器・木製品を壁いっばいに展示しています。木製品は通常残りにくいものですが、新潟市は低湿地遺跡が多くあるため出土量が多いことが特徴です。木簡(展示は複製品)は重要な発見となったものもあり、最近では南区馬場屋敷遺跡・浦廻遺跡出土の木簡が注目されています。

展示室二は三部門に分かれています。まず「新潟市文化財センターの活動」では、日ごろ私たちが行っている業務を紹介しています。発掘調査現場の様子を再現した西区四石遺跡の

研修室一・二(テーブル付で約百人収容。研修室二は通常体験学習室として利用)、保存処理室、特別収蔵庫、民俗資料収蔵庫(旧黒崎町で保管されていた民具で蒲原地方の農具、漁具、生活用具など)等があります。

旧武田家の隣にある畜舎は明治から昭和初期にかけて蒲原平野の農家の多くに備えられていた牛馬を使う脱穀施設です。旧黒崎村あたりでは「カラカサ小屋」と呼ばれることが多かったようです。この畜舎は大正十年頃(昭和十二年頃まで実用され、西区板井(旧黒崎町板井)の木工、荻野氏が製作したと伝えられています。

当センターでは、いろいろな催し物も行っています。

八月二十一日には、開館を記念してシンポジウム「遺跡からさぐる新潟の原点」新潟の低湿地は歴史の宝庫」を新潟市民プラザで開催しました。新潟にゆかりのある先生方を招いてのシンポジウムで、沢山の人においでいた



文化財センターの外観



エントランス



展示室



- お車でお越しの方
北陸自動車道黒崎スマートインターを北へ約9分(2.9km)
新潟西インターを南へ約16分(6.0km)
- 電車をご利用の方
JR新潟駅から車で約39分(14.4km)
JR越後線 寺尾駅から車で約18分(6.1km)



新潟市文化財センター

「新潟市文化財センター」
住所：〒950-1122 新潟市西区木場2748-1
電話：025-378-0480 FAX：025-378-0484
E-mail：bunkazai@city.niigata.lg.jp
開館時間：9:00～17:00
休館日：月曜日・休日の翌日・年末年始(12月28日～1月3日)
入館無料

ジオラマや作業の流れを解説した映像もあります。次の「遺跡が語る新潟の歴史」は、市内から出土した旧石器時代から江戸時代までの遺物が展示され、身近な歴史を見ることが出来ます。

は、各地からの土器の流入があります。縄文時代以来、各地域との交流が盛んであったことがわかりただけです。保存処理室は、新しく導入された設備であり、木製品や金属製品などの腐食や劣化を防ぐために理化学処理を行います。もうい遺物が多いため、細心の注意を必要とします。

特別収蔵庫は、保存処理が終了した金属製品や木製品を収蔵します。温湿度が管理され、劣化を防ぎます。二階には、調査研究室、図書室、資料収蔵庫、遺物洗浄室、写場、ボランティア室、埋蔵文化財収蔵庫などがあります。調査研究室は、調査記録や遺物の整理、報告書作成などを行う部屋です。埋蔵文化財収蔵庫は二・三階にあり、深さ十五センチメートルの通常の収納箱で約四万箱が収蔵可能です。現在、約一万三千箱分の遺物を収蔵しています。

第八回むかしのくらし展

「今日は何を着よう？く着るものいまむかし」

藍野 かおり

当館では毎年、小学三・四年生社会科の単元に対応した「むかしのくらし展」を開催しています。これは、館蔵資料を中心に毎年異なるテーマを設定し、昔の生活道具を紹介するものです。

また、時代が進み、女性はカツギの替わりに衿に晒を巻き、白手拭をかぶるようになり、カツギと白袴は別の役割を果たすものですが、簡略化の過程で一つの形式に省略されていったと思われま

せんでした。着物から洋服への移行の過程では、これまでの着物の仕立て方を活かし、洋服の要素を持つ改良衣が考案されました。また、着物を着る時間を短縮するため、名古屋帯や二部式の作り帯などの簡便帯が考案されたのもこの運動の一環でした。改良衣はそれほど普及しなかったようですが、簡便帯は多くの女性に受け入れられました。

本展は明治時代から昭和三十年代を対象にしています。着るものの変化と合わせて、その背景にあるそれぞれの時代の考え方についても思いを巡らせていただきたいと思います。また、本展をご覧いただき、着ていたものの記憶を呼び起こし、家族や仲間と語り合ってください。ただ、家族や仲間と語り合ってください。ただ、家族や仲間と語り合ってください。

第八回目となる今回は、衣類と衣類に関わる道具を紹介しています。本稿では、その中から2つのトピックを取り上げてお伝えします。

このように白のものを身に付けることを「イロを着る」といい、身に付けられた手拭も「イロ」と称しました。

一方、技術面から洋服文化を支える下地づくりも行われます。高等女学校では裁縫の授業に洋裁が導入されました。女学生は、ミシンの使い方やシャツの縫い方を学びます。また、大正末期には、新潟高等女学校の学生の服装が長着に海老色の袴から洋装の制服に変わりました。制服も女学生が授業の一環として自ら仕立てるものでした。また、婦人向け雑誌では子供服や婦人服の仕立て方を紹介したり、型紙が付録に付いたり、洋服を仕立てる方法が記事になっていました。

皆さんのご来館をお待ちしています。
(あいの かおり 学芸員)

【葬式と衣】

現代では葬式に参列する誰もが黒の喪服を着用します。しかし、かつては近親者と一般参列者の服装に明確な区別があり、皆が黒い服を着た訳ではありませんでした。

明治時代になり、軍服や制服が制定され、男性の洋服着用が進みます。一方で女性の洋服着用は欧米文化を享受した一部の上流階級に過ぎませんでした。

大正期から昭和初期にかけて、成人女性の洋装化はなかなか進展しませんでした。が、子どもの洋装化は進み、それを支える母親たちも洋装の知識を持ち始めていました。誰もが洋服を着るようになるのは終戦後のことですが、その基礎は大正末期から昭和戦前期にかけての取り組みにあったと言えるのではないかと思います。

近所の人や仲間などは普段の着物に羽織を着用しました。死者の親兄弟など、血縁の濃い人のことを新潟ではミニツイタ(身に付いた)人といい、他の人とは違う服装でした。一般的に、ミニツイタ男性は白無垢、あるいは黒紋付に白袴を身につけます。女性は、白無垢、あるいは、江戸袂や黒紋付を着て白手拭をかぶり、葬列に野辺送りではカツギをかぶり、葬列に加わりました。

また、ミニツイタ人は、白袴や白無垢のかわりであったり、白袴に付け加えるという形で、黒紋付の衿に晒をつけたり、白手拭を首に巻くということもありました。ここから「白色を身に付けること」が重要だったことがわかります。

大正期になると生活改善同盟会の生活改善運動によって、女性や子どもにも洋服着用を推進する動きが現れます。この運動では、洋服の利点として、着物に比べ必要な布の量が少なく済むので経済的であることや、体にフィットして動きやすいこと、着脱が着物より簡単であることが強調されました。さらにこの場合は、洋服は帯で体を締め付けなくて済むことや、運動をする時に動きやすいことから、成長を妨げず健全な子どもを育てることができるとされました。

しかし、洋服の導入は容易ではありませんでした。

明治時代になり、軍服や制服が制定され、男性の洋服着用が進みます。一方で女性の洋服着用は欧米文化を享受した一部の上流階級に過ぎませんでした。

大正期になると生活改善同盟会の生活改善運動によって、女性や子どもにも洋服着用を推進する動きが現れます。この運動では、洋服の利点として、着物に比べ必要な布の量が少なく済むので経済的であることや、体にフィットして動きやすいこと、着脱が着物より簡単であることが強調されました。さらにこの場合は、洋服は帯で体を締め付けなくて済むことや、運動をする時に動きやすいことから、成長を妨げず健全な子どもを育てることができるとされました。

大正期から昭和初期にかけて、成人女性の洋装化はなかなか進展しませんでした。が、子どもの洋装化は進み、それを支える母親たちも洋装の知識を持ち始めていました。誰もが洋服を着るようになるのは終戦後のことですが、その基礎は大正末期から昭和戦前期にかけての取り組みにあったと言えるのではないかと思います。



常設展示室から 近代的港湾都市への変貌

常設展示「新潟築港と都市化」のコーナーに、壁面に2枚の沼垂・山の下地区の地図が展示してあります。一つは大正3(1914)年、新潟市と沼垂町が合併した時のものです。信濃川には長大な2代目萬代橋が架かっていますが、新潟駅のある流作場や山の下にはほとんど開発の様子が記されていません。もう一方は昭和5(1930)年のものです。前年の架け替えで短くなった3代目萬代橋、県営埠頭や臨港埠頭、さらに工業地帯が整備された様子がわかります。この約15年の間に何が起ったのでしょうか。



広がる工場地帯 (常設展示室映像「近代的港湾都市への変貌」より)

その変化は「近代的港湾都市への変貌」のモニターに体験してもらえます。「地形の変化」のページでは、萬代橋から河口までの信濃川流域の変化を大正と昭和の地形を重ね合わせて比較しています。そして、かつて牧場だった信濃川河口付近の変貌、近代的な埠頭の登場、変わる萬代橋と信濃川の埋め立てを解説しています。一方「広がる工業地帯」のページでは、信濃川の両岸に明治期から昭和初期に作られた県営埠頭や臨港埠頭などの港湾施設や、日本石油や新潟鉄工所などの工場の設置や概要を解説しました。これらは、現代の新潟港の歴史を語る上で大変重要な要素なのです。

明治期、開港場となった新潟でしたが、信濃川の河口の浅い港であったため外国の大型貨物船は入港できず、貿易港としては不振を極めます。それゆえ埠頭のある近代港湾の「築港」は新潟市の悲願でした。明治41(1908)年、越後平野の洪水対策として大河津分水が着工されます。分水の完成によって河口に流れる信濃川の水量制御が可能となる見通しができました。これをきっかけに新潟市と沼垂町は合併し、新潟築港が実現することになりました。大正15(1926)年、倉庫や鉄道を備えた県営埠頭が完成し、これらを中心に新潟市は近代的な港湾都市へと姿を変えていくのです。



展示コーナー

長谷川 伸(はせがわ しん 学芸員)

おすすめの1冊

文化財アーカイブの現場
—前夜と現在、そのゆくえ

本書のタイトルにある文化財アーカイブとは、文化財の記録を作成することです。近年は、デジタルで記録する「デジタルアーカイブ」が、貴重な資料を人々により身近なものとし、また後世へ伝えていくためのひとつの方法として発展してきています。記録された情報を用いて、普段気軽に接することのできない文化財を復元し、教育普及の場面で活用されることもあります。また細部まで観賞できるコンテンツとして活用する博物館が増えてきたりと、一般の人にとっても身近なものになりつつあります。本書では、様々な文化財のデジタルアーカイブに携わってきた著者が、その経験を活かし、実例を紹介して文化財アーカイブの意義や必要性について語っています。

文化財のデジタルアーカイブには、コストや著作権など検討すべき問題も内在していますが、新潟市の貴重な資料を所蔵している当館にとっても、それらの資料の情報を「アーカイブ」し、皆さまに身近に感じただけのように公開していくことは重要な課題です。本書は、今後さらに発展していくであろう「文化財アーカイブ」について考えるにあたり、その入門編となる一冊です。



福森大二郎 勉誠出版 2010年4月 (並木晴香 学芸員)

来年一月七日から企画展「活動展示」を、昨年度に続いて開催します。

この活動展示という企画展を開催する背景には、予算縮小のため、展示製作費や資料輸送費、広報費等を要する従来規模での企画展を開催することが困難になった、という事情があります。しかし、この予算の縮減を機に、単に企画展を減らすのではなく、手づくりでき、重宝すべき取り組みを企画展事業に組み入れる機会と捉えました。活動展示

は、みなとびあの目指すべき姿を議論して生まれた企画なのです。

具体的には、昨年度の活動展示2010では、「ひきだす」をキーワードに、博物館の調査研究を通じて資料から情報をひきだし、価値を見出す博物館の活動そのものを展示すること、資料から情報をひきだす手法・プロセスを、プログラムとして実際に展示会場で開催して紹介すること、それらを手掛かりとして展示空間を観覧者が自分の経験や知識を使って展示資料から情報をひきだす場



平日の資料整理活動の様子

	観覧者計	日数	1日平均
全会期	2,073	41	50
平日のみ	823	23	35
土日祝	1,196	17	70
行事日	934	12	77
行事参加者計	173人		
行事日観覧者の行事参加率	14%		

活動展示2010実績

とすることを目的としました。この一連の企画のターゲットに想定したのは、当館の展示や講演会に強い関心を寄せて下さっている層です。

広報費を省いて来館者の少ない冬季に開催したため来館者数は少なかったものの、企画に携わった実感としては観覧者の反応に手ごたえを感じました。週末開催の十二回に及ぶプログラムもそれぞれ概ね好評でしたし、目的はある程度達成できたと思います。

活動展示2010の来館者数の傾向を見ると、総観覧者数は二〇七三人のうち平日と土日の観覧者数の比率が二対二でした。原則土日祝日に開催したプログラムにはリピーターの参加も見られました。また、プログラムの趣旨に感じてもらった層の参加者が参加して、自由に来館・観覧している人に対して偶発的で限られた時間の中で、活動展示の意味を伝えるには、もっと工夫が必要と感じました。

しかし、平日に実施した博物館資料から情報をひきだす資料整理活動の観覧者数は週末の約半数と少なく、また実際に展示室での活動を踏まえた実感として、自由に来館・観覧している人に対して偶発的で限られた時間の中で、活動展示の意味を伝えるには、もっと工夫が必要と感じました。

そのアイデアとして、二〇一一年度の活動展示では、平日には事前に募った参加者とともに資料整理の作業を行い、資料から情報をひきだすプロセスを共有するプログラムの開催を考えています。昨年度開催のプログラムが、主にひきだした結果の理解のために、そのプロセスを紹介するプログラム構成だったのに対し、ひきだすプロセスそのものに関わり、資料からひきだす作業の手法やおもしろさを伝えることに重点をおいたプログラムといえます。

今年度も古文書等数々の資料を市民から寄贈いただいております。歴史博物館として地域社会の資源とすべく資料整理・管理の作業を進めています。この作業を活動展示の場に組み込むことで、新たな資料群からどのような情報をひきだせるのか、どのように地域の資源として伝えていくことができるのか、利用者のみならず、市民とともに作業する中で考えたいと思います。

なお、活動展示2010の内容・成果については藍野学芸員が紀要第7号で詳しく報告しておりますのでご覧ください。

(もり ゆきひと 学芸員)

「淳足柵」沼垂城」の探索

「長者の伏せた「カメ」」

『日本書紀』大化三(六四七)年、是歳条に「淳足柵」を造った有名な記事があります。しかし、その遺跡は不明です。一九九〇年、長岡市和島の八幡林官衙遺跡から、養老(七一七〜七二四)年号を伴う「沼垂城」を墨書した木簡が出し、私は「淳足柵」は、「沼垂城」と表記を変えて存続し、それが新潟市中央区沼垂町の旧地にあった可能性が高いと考えました。さらに、各地に遺跡と長者伝説との密接な関係を示す事例が多いことから、沼垂町旧地の王瀬の長者伝説や河渡・松崎付近の「王五、王六長者」が埋めた「甕」の伝承に注目してきました。

天保一三(一八四二)年九月、新発田藩領村役人で地理学者小泉蒼軒が松崎村と河渡村との村境で一人の農夫に出会い、「この辺りに昔の長者屋敷という所あり」と聞けり、そは「いずれなりや」と尋ねました。すると農夫は、「この所なり。道の左側に田あり、ここに長者の伏せたるかめ」といふものあれども、いと大きやかなるものを深く伏せこみて、掘り出すことかなわす。そのあるじの名は、王五と称し、その弟は王六、また王七と、三人のものが宅を三ツにかまえて、賑わわしく住まいし

伝えはあれども、いつの事なりしや伝えなければ知らず」と答えたこと『小泉蒼軒日録』は記しています。(原文の表記を改めた)

奈良県飛鳥池遺跡出土の「亀形石槽」は齊明天皇の祭祀遺構とする解明が進んだ二〇〇五年頃、私は突如「えっ！伏せたるかめ」は、もしか飛鳥と同じ動物の亀形の石槽かもしれない」とひらめき、以来、私はこの考えの虜となりました。

大阪市四天王寺の「亀井の水」をうける「亀の石槽」が、飛鳥池遺跡の「亀形石槽」に続く第二号と考えるようになりました。そして今、「亀井の水」を天文二十二(一五五三)年に三条西公条が「吉野詣記」に次のように詠んだことが注目されます。

「あしき道六をかくせる亀の水五のこりここにすまさん」

この和歌の数字の六は道祖神、数字の五は五悪五濁のことを意味します。王五や王六という河渡・松崎の長者の名前もそれに関連するのだとすると、この伝承は室町後期に遡り、伝承のもとになった「伏せたるかめ」はさらに古いものになると考えられ、第三の亀形石槽かもしれないと思われてくるのです。

収蔵資料紹介

「大花火」 慶応三年

今年も九月九日・十日の両夜、小千谷市片貝では花火大会が開かれました。地元の方々の心をこめた奉納と日本一の四尺玉で知られています。この花火奉納は江戸中期には始まり四〇〇年の伝統があるとも言われています。当館では、この片貝花火の一八六七(慶応三年)の番付を所蔵しています。

表紙には「大花火」と記され、「片貝邑(楯カ)観音堂境内」で六月二十六日昼から二十八日夜まで開催されたことがわかります。世話人の中には「惣若連中」がいます。「補助」の「大矢幾八・練香屋長兵衛」は花火師でしょうか。

花火は打ち上げ順に記されているらしく、冊子の上段は二十六日、下段は二十七日の花火です。例えば二十七日夜の部の初めには「柳火 一尺二番組連中」とあり、花火の名、大きさ、奉納者の名が記されています。掲載されている花火は一五八発で、昼花火が両日で三六発、二十六日夜が六六発、二十七日夜が五六発です。また、四寸玉が一七発、五寸玉が一〇一発、七寸玉が三三発で、最も大きな一尺玉は七発です。奉納者は姓名や屋号、雅号で記され、連の奉納者もいます。また、来迎寺や千谷川、岡野町、関原などの人もあり、花火が広域で知られていたことがわかります。



番付の最後に「二十八日夜 地雷火・大仕掛 太刀川守太郎・太刀川菊之助・千原富之允・太刀川又八郎」とあり、最終日は仕掛け花火が奉納されたようです。さらに裏表紙には「右之外入組玉多分御座候得共、紙数余り相嵩ミ候二付略す」とある。「入組玉」とは何がよくわかりませんが、単発の打ち上げ花火の合間に小花火も上がったのでしょうか。いずれにしても盛大な花火奉納の様がしのべれます。

(伊東 祐之 副館長)